

ルカによる福音書3章7-8節 「悔い改めにふさわしい実」

1A まむしの子孫

1B 内から出る毒

2B 罪からの救い

1C 虐げられた者にある虐げ

2C 悲劇からの学ぶ神への恐れ

3C 日常に潜む貪欲

2A 悔い改めの実

1B 持っている物の分かち合い

2B 貧しい者の分かち合い

3B 外部者の分かち合い

4B 召しへの応答

本文

ルカによる福音書3章を開いてください、私たちの聖書の学びはルカ2章まで読むことができました。今日は3章を午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は7-8節に注目します。「7 ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」

私たちは、ヨハネの誕生とイエス様の誕生の記録を読んできましたが、3章からヨハネが公の宣教の活動を始めるところに入って来ます。彼はユダの山地に育ちましたが、荒野に移り、時が来るまでそこで生活していました。そして、皇帝ティベリウスの治世の第十五年、紀元後29年になりますが、その時に、「3:3 罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ」を説いていきました。悔い改めのバプテスマとは何でしょうか？その部分を今、読んだのです。バプテスマとは、水に浸かることですが、ユダヤ人の人たちは清めのために水の中に入ることは、しばしば行っていたことでした。当時、いろいろな意味で生活に圧迫を受け、困窮していた時にヨハネが現れ、人々はこの人には神の言葉があると分かました。ユダヤ人には、いろいろなグループの人たちがいましたが、それぞれがメシア、救世主を求めていたのです。

1A まむしの子孫

それでヨハネのところに救いを求めて近づいたのですが、彼の第一声が、とんでもない言葉だったのです。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。」ユダヤ人

は、自分たちがアブラハムの子孫だから、アブラハムに約束されていた神の祝福にあずかることは予め定められていると信じていました。ユダヤ民族であれば、自動的に神の契約の中にあるので、救いを受け取ることができると思っていましたが、なんと、アブラハムの子孫ではなく「**まむしの子孫**」だということです！聖書では蛇がエバを惑わしました、その子孫であり、しかも毒蛇の子孫だということです。だから、神の御怒りを免れることはできないと真正面から言われてしまったのです。

1B 内から出る毒

なぜヨハネは、彼らを「まむしの子孫」などという、かなりきつい言葉を語ったのでしょうか？それは、彼が説いていたのは、「**圧迫されていたところからの救い**」ではなく、「**罪からの救い**」を説いていたからです。父ザカリヤは、誕生したヨハネについて、「**1:77 罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。**」と預言しました。自分たちの中にある罪から解放されるための知識をヨハネは与えたのです。

まむしのように、その人の内側から毒が出て来ます。人を苦しめ、痛めつけるものを持っています。詩篇 140 篇には、こう書いてあります。「詩 140:2-3 彼らは心の中で悪を企み日ごとに戦いを仕掛けてきます。蛇のようにその舌を鋭くし唇の下にはまむしの毒があります。セラ」心の中に毒があるので、その人が何かを語ると、慇懃であるかもしれませんが、毒を向けられた本人は、じわじわとその毒が体に、魂に回って行くのです。そして、その人を倒してしまうほどの力を持ちます。イエス様は、汚れは内から出て来るものだと言われました。「マル 7:21-23 内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」

2B 罪からの救い

しかし、彼らを取り囲まれていた社会は、とても苛酷なものでした。ユダヤ人は、バビロン捕囚から帰還した後、ペルシア帝国の中で生き、ギリシア時代、ユダヤ教徒に対して徹底した弾圧が行われた時期がありました。そうこうしているうちにローマが勢力を持ちました。そこに便乗したヘロデがエルサレムを攻め取り、ユダヤ人の王となりました。ヘロデ大王はイエス様を殺すために、ベツレヘムにいる二歳以下の男の子を全て虐殺しました。そういったことが平気で行われていた社会なのです。そして、イエス様の時の時代はその地域の広大な土地は外国人が所有していたので、農民は借りて耕作しなければいけませんでした。ですから、圧迫や虐げは相当なものでした。そこで、メシアが諸国のくびきを打倒して、虐げられた民を救われるという言葉を受けば、ローマからの救いであると誰もが思ったのです。確かに、そうした虐げの一つ一つは、とても酷いもので責められるべきことです。彼らの訴えは実に正当であり、間違ったことではなかったのです。

1C 虐げられた者にある虐げ

ところが、バプテスマのヨハネは、その虐げられた民に対して、云わば「あなた方の間に、虐げが

ある」と叱責したのです。それぞれが、自分たちの生活で苦しみがあるのに、それでも「あなたがたはまむしの子孫だ」と言って、はばからなかったのです。なぜなら、人は虐げられていても、自分自身もその中にいながらにして、同じことをしているというぐらい、罪深いからです。量的には、そりゃあ、ローマによる虐げと比べたら、蟻と象ぐらいの差はあるでしょう。けれども、それでも蟻が他の蟻に対して、同じように虐めるとことをする、罪の性質が私たちにあるということですね。

モーセがエジプトの宮廷に居た時のことを思い出してください。彼はファラオの養子でした。同胞の民のことが気になって、彼らの苦役を見ました。一人のエジプト人がヘブル人の一人を打っているのを見ました。それで彼はそのエジプト人を打ち殺して、砂の中に埋めました。ところが、次の日、二人のヘブル人が争っているのです！そして悪いと思う方に、「どうして自分の仲間を打つのか。」と言いました。すると、「出エ 2:14 だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。」と言って反発して、モーセがエジプト人を殺したことを話しました。ここですね、みなエジプト人に虐げられています。けれども、同じ虐げられている仲間を打つなんていうことを行って、それをモーセが指摘すると、「だれがお前を、指導者にしたのか？」と食ってかかるのです。モーセをキリストに置き換えてみてください。イエス様は、私たちの主であり、かしらです。この方が、私たちの罪を明らかにされる時に、外や周りにはいろいろ大きな悪があるのに、「なんであなたは、私のこういう細かい心のことに、干渉してくるのですか？周りには悪いことがいっぱいじゃない！いちいち、私の生活に関わって来ないでよ！」と反発するでしょう。

これが云わば、イスラエルの民にあった頑なさだったのです。ヨハネも、そしてイエス様も仲間にも迫害されましたが、それは虐げている人も、虐げられている人も等しく罪人とし、外部ではなく内部にある罪を明らかにしていかれたからです。

2C 悲劇からの学ぶ神への恐れ

私たち人間は、どうしても外側のこと、表面的なことだけを問題視してしまいがちです。ルカによる福音書には、イエス様が彼らの焦点を、自分自身に向けさせるよう戒めている場面が多く出て来ます。

ピラトがなんと、ガリラヤから来た者たちを殺して、そしてガリラヤから来た者たちが礼拝で献げるいけにえに、その血を混ぜたというのです。総督ピラトは、相当、残虐な指導者でありました。こんな酷いことをしているのだと人々が伝えに来ました。するとイエス様は、「ああ、なんという悲しい出来事でしょうか。ピラトが神に裁かれぬように祈ります。」と言われたのではなく、「13:3 そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったと思いますか。そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」と言われたのです！もちろん、それは悲惨な出来事です、ピラトは残虐です。けれども、イエス様が来られたのは彼ら一人一人が彼ら自身の罪から

救われることであって、彼らが真実な神の民となり、アブラハムの子孫となるためです。ですから、そこで悲劇を他人事のようにして考えて、その悲劇から語られている神の声を聞いていないことに、警告を発したのです。津波の被災の時にも、「なんで神はこんな酷いことをしたのか？」という声を聞きましたが、その時に、「あなたがたにはそんな災難が下らないと思うのですか？悔い改めないなら、同じように滅びるのですよ。」というのが、イエス様の声なのです。

3C 日常に潜む貪欲

本当に、私たちは自分の心の動きというものを、自分自身も分からないものです。生活の中で起こってくる、いろいろなことで、その問題に取り組んでいるのですが、実は自分の心がいつの間にか悪いことに傾いていることがあります。群衆の一人がイエス様に、「12:13 先生。遺産を私と分けるように、私の兄弟に言ってください。」と叫びました。イエス様は、ご自身は裁判官や調停人に任命されたのではないと言われます。そこではなく、主は、「12:15 どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。」と言われたのです。相続争いをしている、そこには正当な理由があります。それ自体に悪いことはありません。けれども、問題は、いろいろなことをしている中で、心から出てくる汚れたものをそのまま放置して、自分は正しいことをしているのだと思い込んでいることです。それで、イエス様は貪欲について警告するために、金持ちが一夜にして死んでしまう喩えを語られました。

先の酷い虐殺についてもそうだったように、相続について正当な分与をしてもらえないということは決して間違った訴えではありません。それ自体は正しいのです。けれども、私たちの問題は正しいとされることを行っている中で、心に潜む悪い動機を放置してしまうことであります。そこで、私たちが正しいことをしていると思われる中で、いつの間にか虐げられている仲間の中でさえ、小さな虐げが起こり、神のかたちに造られた人間の尊厳がどんどん損なわれていくようになります。

2A 悔い改めの実

そこでヨハネは、悔い改めを説きました。すると、一人一人が、「どうすればよいのですか」と尋ねに来ました。悔い改めにふさわしい実を結ばせるには、どうすればよいのかを聞いてきました。イエス様は、群衆にこう言われました。「ルカ 3:11 下着を二枚持っている人は、持っていない人に分けてあげなさい。食べ物を持っている人も同じようにしなさい。」

1B 持っている物の分かち合い

悔い改めについて、彼らはこれを聞いてびっくりしたでしょう。下着がたった二枚しかないのです。当時は、こういった場合が結構ありました。服を頻繁に変えるものではなかったのです。たった二枚しかないのに、ヨハネは基本的に、「いや、あなたには二枚もある。一枚を持っていない人に分けてあげなさい。」と言っています。ここから私たちが分かることは、「悔い改めというのは、一歩先んじた良い行いをともなう」ということです。ヤコブが、「4:17 なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。」と言いましたが、そのことです。自分の下着がそれだけ

少ないし、金持ちはそこら辺にいる。その人たちから奪い取って、貧しい人たちに分け与えるべきだ。自分自身は貧しいのだから、与える必要はない、という考えではないのです。

イエス様の時代、今、お話ししましたようにローマによる圧迫が強い時代でした。そして、ヨセフスによるとエルサレムの治安は酷くなっていたそうです。チンピラみたいのがエルサレムに徘徊していました。治安が良くなかったのです、雰囲気は殺伐としており、自分のことを守るだけで精いっぱいだったのです。良きサマリア人の喩えで、ユダヤ人が半殺しにされていましたね。そういった事件は頻繁に起こっていました。ですから、「自分のものを確保したら、絶対に手放さない」というのが彼らの普通だったのです。ところがイエス様は、そのわずかなものから分け与えなさいと命じられます。

しかし、悔い改めには、思いの変換があります。大きな変換があります。二枚しか持っていないのではないのです、「二枚も持っている」と思いが変わるのです。そうです、空の鳥は神に養われています。ゆりの花はきれいに着飾っています。ましてや神のかたちに造られた神は、私たちを乏しくすることはありません！パウロは、「Ⅰテモ 6:8 衣食があれば、それで満足すべきです。」と言いました。私たちは、いつの間にか心の中で「今、主が私に二枚も与えてくださっている」とならないで、「二枚しか下着がない」と思い煩うのです。それで、分け与えるのを惜しむのです。

2B 貧しい者の分かち合い

イエス様が過激なことを語られているのではありません。イエス様は、私たち人間の心をよく知っておられるからです。教会が事欠いている時に、それを助けるのは実は、富んだ人々ではなく、貧しい人々ということが多いです。コリントにある教会は、裕福な人が多かったようです。けれども、パウロは彼らから報酬を受け取っていませんでした。ただでさえ、偽教師がやって来て彼のことをああでもない、こうでもないと評判を引き落としていたからです。わずかでも、非難されるようなことがあってはならないとして、パウロは自分の手で働きました。

けれども、エルサレムにある教会が窮乏状態でした。それでパウロは、各地の教会で献金を募りました。そこで反応したのはコリントの教会ではありませんでした。テサロニケやピリピなど、マケドニアにある諸教会の人たちだったのです。「Ⅱコリ 8:2-4 彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。私は証します。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。」ここに、経済状況ではなく、もっぱら人の心が、献金ができるかどうかを決めるものであることが分かります。

3B 外部者の分かち合い

そして、人というのは、内部にいる人々、仲間に対してはないがしろにしてしまう傾向を持ってい

ます。良きサマリア人がそうです。ある人が、エルサレムからエリコに下る時に、強盗に襲われましたが、祭司がたまたま歩いていたのですが、通り過ぎました。レビ人も、彼を見たら、反対側を通り過ぎていきます。けれども、サマリア人は、見てかわいそうに思いました。そして手当てをして、宿屋に泊まらせて、帰りに費用を支払うとまで言いました。サマリア人が彼にとっての隣人となりました。同じユダヤ人なのだから、彼が介抱してあげるのが普通と思いきや、外の人が介抱したのです。ここでイエス様に律法の専門家が、「10:29 では、私の隣人とはだれですか。」と尋ねていました。ユダヤ人ではないサマリア人がその半殺しにされた人の隣人となったのに、自分たちはそれを行っていないのです。

4B 召しへの応答

こういうことを見ていくと、だんだん、ヨハネが、虐げられているはずのユダヤ人、自分たちの同胞に向って、「悔い改めなさい」と説いたのが分かってきたかと思えます。神の救いの到来を妨げているのは、ローマでも他の誰でもなく、自分自身たちなのだということです。一見、悪いものは何もないように見えます。むしろ、大変な状況かもしれません。けれども、それこそが私たちの心を頑なにする原因であり、神の御心は罪からの救いであることを見失ってしまうのです。

神は、根本においてご自分の御子キリストのところに来てほしいのです。そして共に食事をしてほしいと願われています。そこで、私たちはいろいろな理由を付けてしまいます。王が王子のために、結婚の披露宴を催しましたが、招待された客は一人一人、断りました。「マタ 22:5-6 ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き、残りの者たちは、王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった。」王の招待に、自分の生活を変えたくない、畑をしているなら、そのまま畑をして応えません。そして、応えなさいという預言者、王のしもべを遣わせば、「俺たちの支配者になっているつもりか？」として、殺して拒んでしまうのです。イエス様は、「22:14 招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです。」と言われました。

群衆は応答して、バプテスマを受けました。取税人も、また兵士までが、バプテスマを受けました。悔い改める決意をして、それにふさわしい行いに変えていきました。それぞれが、自分自身こそが問題なのだと知りました。そして、他の人がしていないからしないではなく、むしろ率先して他の人たちがしていないことも行っていきました。そして、自分にはできない、足りないではなく、実は十分に与えられていて、それを分かち合っていたのです。そこで初めて、イエス様が生きて働いてくださいます。仲間が集まればそこが神の国ではなく、悔い改める者たちが集まれば、そこに神の国ができます。